

えました」と話します。

行政が運営するこうした活動場所の数は地域間で格差があります。行政ではカバーしきれない、こうした格差を補うことも法人には求められるといえます。

「地域には小さな単位で個性があり、国や自治体の施策ではカバーしきれない部分があっても生じます。そこをしっかりと見て、未来図を描きながら取り組むことは、我々のような法人規模だからこそできることだと思います」(森田さん)

子育てを支え、

母親の就職を支援する

さらに合掌苑では、「働きにくい人が働きやすい環境の提供」という理念を掲げ、障害者や育児中の母親が働きやすい環境を整備しています。その代表が、「マザーズ」という事業です。マザーズとは、育児に伴い退職した母親に対する再就職支援で、保育園の選考時期前に採用内定が得られるた



マザーズを利用し、合掌苑で働く小巻友梨さん

め、入園の申し込みをスムーズに行えます。合掌苑ではこの事業を通じ、育児中の母親の雇用にも力を入れています。

マザーズを利用し、合掌苑で働く小巻友梨さんは、「就職先を探していたときに、ハローワークで最初に紹介されたのが合掌苑でした。11月末に採用していただき、無事に保育園の一次選考を通ることができました」と言います。

地域のなかでの法人のあり方

このように、多角的に積極的な地域貢献を進める合掌苑。地域のなかで介護職が果たすべき役割をどう考えているのでしょうか。

「介護職には「ニーズに応える」一方で、「自分が高齢になったときこんな地域で生活したい」というビジョンをもっとほしい。

これからの地域像を描き、施設やサービスをつくりかえていく役割があると考えています」と岡根さんは話します。

とはいえ、森田さん、神尾さんをはじめ、事務局スタッフの多くは介護職出身。日常業務に追われる介護職が地域に目を向けることの難しさも理解しています。

「施設の中にと外の世界が見えにくくなりがちです。ほかの部署の業務の『応援』などでもいいので、まずは外に目を向けるきっかけをつくってもらいたい」(森田さん)

地域包括ケアの推進がうたわれるなかで、介護職がその経験をもって地域にかかわっていく——合掌苑の地域貢献の取り組みからは、これからの介護職のあるべき姿も見えてくるようです。

(文●編集部)

OHAYO VOICE

職員も地域に暮らす「住民の一人」 という視点に立つ



宮島 渡

社会福祉法人恵仁福祉協会
高齢者総合福祉施設アザレアさんだ
常務理事・総合施設長

社会福祉法人の地域貢献とは、地域の潜在的なニーズに対して積極的にアウトリーチすることにより、ニーズを顕在化させ、サービスの創造につなげる取り組みだといえます。しかし、これまでの地域貢献の多くは、夏祭りを通じた施設の開放や講演会などイベントや啓発活動の開催が中心であったように思います。

それに対して合掌苑は、理事長の明確なビジョンのもと、「地域福祉支援事務局」を組織し、積極的に地域ニーズを発掘し、きめ細かな支援や新たな社会資源の創造につなげてきました。特に私が注目したのは、地域へのかかわりを通じた「貢献意識」が、職員の仕事へのモチベーションアップにつながったり、介護業界と学生の最初の接点となったり、障害者や育児中の母親の働きやすい環境を整備したりと、地域住民、法人、働く人たちのWin-Winの関係性を地域貢献によりつくりだしていることです。

職員が身近な地域の暮らしに根ざしていない、地域との関係が希薄な職場では、地域住民の困りごと共感することはできないでしょう。職員も地域に暮らす住民の一人であることから、職員の「ここで働きたい」が住民の「ここに暮らしたい」とつながったとき、地域に根ざした社会福祉法人になるのだと痛感しました。